

# 雪靈記事

泉鏡花

青空文庫



「このくらいな事が……何の……小児こどものうち歌留多かるたを取りに行つたと思えば——」

越前えちぜんの府、武生たけふの、侘わびしい旅宿やどの、雪に埋れた軒を離れて、二町ばかりも進んだ時、吹雪に行悩みながら、私は——そう思いました。

思いつつ推切おしきつて行くゆのであります。

私はここから四十里余り隔たつた、おなじ雪深い国に生れたので、こうした夜道を、十町や十五町歩あ行くるのは何でもないと思つ

たのであります。

が、その凄じさすさまといったら、まるで真白まっしろな、冷い、粉の大波を泳ぐようで、風は荒海に齊ひとしく、ごうごうと呻うなつて、地——と云つても五六尺積つた雪を、押揺おしゆすつて狂うのです。

「あの時分は、脇の下に羽でも生えていたんだらう。きつとそうに違ちがい。身軽に雪の上へ乗つて飛べるように。」

……でなくつては、と呼吸いきも吐つけない中うちで思おもいました。

九歳このつとお十歳こどもばかりのその小兒は、雪下駄、竹草履、それは雪の

凍いてた時、こんな晩には、柄にもない高足たかあしだ駄ださえ穿はいていたのに、転ころびもしないで、しかも遊びに更けた正月よの夜よの十二時過ぎなど、近所の友だちにも別れると、ただ一人で、白やしろい社の広ひろい境

内も抜ければ、やしきまち 邸町の白い長い土塀も通る。……ザザツ、ごうと鳴つて、川波、やまおろし 山嵐とともに吹いて来ると、ぐるぐると廻る車輪のごとき濃く黒ずんだ雪の渦に、くるくると舞いながら、ふわふわと済まアして内へ帰つた——夢ではない。が、あれは雪に霊があつて、小児を可愛いとがつて、連れて帰つたのであろうも知れない。

「ああ、酷ひどいぞ。」

ハツと呼吸いきを引く。目口に吹込む粉雪こゆきに、ぱツと背を向けて、そのたびに、風と反対の方へ真俯まうつむ向けになつて防ぐのであります。こういう時は、その粉雪を、地じぐるみ煽あおりた立てますので、下からも吹上げ、左右からも吹捲ふきまくつて、よく言うことですから、

面おもての向けようがないのです。

小児の足駄を思い出した頃は、実はもう穿はきものなんぞ、疾とつの以前になかったのです。

しかし、御安心下さい。——雪の中を跣足はだしで歩行あるく事は、都会の坊ちゃんや嬢さんが吃驚びっくりなさるような、冷いものでないだけは取柄です。ズボリと踏込んだ一息の間は、冷さ骨髄つめたに徹するのですが、勢いきおいよく歩行あるしているうちには温くなります、ほかほかするくらいです。

やがて、六七町潜つて出ました。

まだこの間は氣丈夫でありました。町の中うちですから両側に家が續いております。この辺は水の綺麗きれいな処で、軒下の両側を、清い

波を打った小川が流れています。もつともそれなんぞ見えるような容易やさしい積り方じやありません。

御存じの方は、武生と言えば、ああ、水のきれいな処かと言われます——この水が鐘を鍛えるのに適するそうで、釜かま、鍋なべ、庖丁、一切の名産——その昔は、聞えた刀鍛冶かたなかじも住みました。今も鍛冶屋が軒を並べて、その中に、柳とともに目立つのは旅館であります。

が、もう目貫めぬきの町は過ぎた、次第に場末、町端まちはずれの——と言うとすぐに大な山おおき、嶮い坂けわしになります——あたりで。……この町を離れて、鎮守の宮を抜けますと、いま行こうとする、志す処へ着く筈はずなのです。

それは、——そこは——自分の口から申兼ねる次第でありますけれども、私の大恩人——いえいえ恩人で、そして、夢にも忘れられない美しい人の侘住居わびずまいなのであります。

侘住居と申します——以前は、北国ほつこくにおいても、旅館の設備においては、第一と世に知られたこの武生うちの中でも、その随一の旅館の娘で、二十六の年に、その頃の近国の知事の妾おもいものになりました……妾めかけとこそ言え、情なさけぶか深く、優やさしいのを、昔の国主の貴婦人、簾れんちゆう中なかつのように称たたえられたのが名にしおう中の河内かわちの山裾やますそなる虎杖いたどりの里に、寂しく山家住居やまがずまいをしているのですから。この大雪の中に。



流るる水とともに、武生は女のうつくしい処だと、昔から人が言うのであります。就<sup>なかんずく</sup>中、蔦屋<sup>つたや</sup>——その旅館の——お米<sup>よね</sup>さん（恩人の名です）と言えば、国々評判なのであります。

まだ汽車の通じない時分の事。……

「昨夜はどちらでお泊り。」

「武生でございます。」

「蔦屋ですな、綺麗<sup>きれい</sup>な娘さんが居ます。勿論、御覧でしょう。」  
旅は道<sup>みちづれ</sup>連<sup>たてば</sup>が、立場でも、また並木でも、言<sup>ことば</sup>を掛<sup>うち</sup>合う中<sup>うち</sup>には、きつとこの事がなければ納まらなかつたほどであつたのです。

往來ゆききに馴なれて、幾いくたび度も蔦屋の客となつて、心得顔をしたものは、お米さんの事を渾名あだなして、むつの花、むつの花、と言いました。——色と言ひ、また雪の越路こしじの雪ほどに、世に知られたと申す意味ではないので——これは後くりごと言であつたのです。……不具かたわだと言ひのです。六本指、手の小指が左に二つあると、見て来たような噂うわさをしました。なぜか、——地方いなかは分けて結婚期が早いのに——二十六七まで縁に着かないでいたからです。

(しかし、……やがて知事おもいものの妾になつた事は前にちよつと申しました。)

私はよく知っています——六本指なぞと、気けもない事です。確たしかに見ました。しかもその雪なす指は、摩耶夫人まやぶにんが召す白い細い花

の手袋のように、正に五弁で、それが九死一生だった私の額に密と乗り、軽く胸に掛つたのを、運命の星を算えるごとく熟と視たのでありますから。――

またその手で、硝子杯コップの白雪に、鶏卵たまごの蛋黄きみを溶かしたのを、甘露そとを灌ぐように飲まされました。

ために私は蘇よみがえ返りました。

「冷水おひやを下さい。」

もう、それが末期まつごだと思つて、水を飲んだ時だったので。

脚気かっけを煩つて、衝心をしかけていたのです。そのために東京から故郷くにに帰る途中だったのでありますが、汚れくさつた白しろ緋がすりを一枚きて、頭陀袋ずだぶくろのような革鞆かばん一つ掛けたのを、玄関さきで

断られる処を、泊めてくれたのも、蛍と紫陽花あじさいが見透みとおしの背戸に涼んでいた、そのお米さんの振向いた瞳めの情なさけだったのです。

水と言え、せいぜい米の磨汁とぎしるでもくれそうな処を、白雪にきみ蛋黄なの情なさけ——萌黄もえぎの蚊帳かや、紅べにの麻、……蚊むしの酷ひどい処ですが、お米さんの出入りには、はらはらと蛍が添って、手を映し、指環ゆびわを映し、胸の乳房すかを透して、浴衣の染の秋草は、女郎花おみなえしを黄に、萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。

「まあ、汗びつしより。」

と汚い病苦の冷汗に……そよそよと風を恵まれた、浅葱色あさぎいろの水団扇みずうちわに、幽かすかに月が映さしました。……

大恩と申すはこれなのです。——

おなじ年、冬のはじめ、霜に緋葉もみじの散る道を、爽さわやかに故郷から引返つかえして、再び上京したのでありますが、福井までには及びません、私の故郷からはそれから七里さきの、丸岡の建場たてばに俤くるまが休んだ時立合せた上下の旅客の口々から、もうお米さんの風説うわさを聞きました。

知事おもいものの妾となつて、家を出たのは、その秋だったのであります。

ここはお察しを願います。——心易くは礼手紙、ただ音信おとずれさえ出来すまい。

十六七年を過ぎました。——唯ただいま今の鯖江さばえ、鯖波さばなみ、今いまじよう庄庄の駅が、例の音に聞えた、中の河内、木の芽峠、湯の尾峠を、前

後左右に、高く深く貫くのでありまして、汽車は雲の上を馳りま  
す。

間の宿で、世事の用はいささかもなかつたのでありますが、可  
つかしさ 懐の余り、途中で武生へ立寄りしました。

内証で……何となく顔を見られますようで、ですから内証で、  
その蔦屋へ参りました。

さつき 臯月上旬でありました。

## 三

門、背戸の清き流、軒に高き二本柳、——その青柳の葉

の繁茂しげり——ここにイみたたず、あの背戸に団扇うちわを持った、その姿が思われます。それは昔のままだったが、一棟ひとつね、西洋館が別に立ち、帳場も卓テ子エブルを置いた受附になつて、蔦屋の様子はかわつていました。

代替りになつたのです。——

少しばかり、女中に心づけも出来ましたので、それとなく、お米さんの消息を聞きますと、蔦屋も蔦ち竜ちよう館りゆうかんとなつた発展で、持もちのこの女中などは、京の津から来ているのだそうで、少しも恩人の事を知りません。

番頭を呼んでもらつて訊ねたずますと、——勿論その頃の男ではなかつたが——これはよく知つていました。

蔦屋は、若主人——お米さんの兄——が相場にかかつて退転をしたそうです。お米さんにまけない美人をと言つて、若主人は、祇園ぎおんの芸妓げいしやをひかして女房にしていたそうですありますが、それも亡くなりました。

知事——その三年前ぜんに亡くなつた事は、私も新聞で知つていたのです——そのいくらか手当が残つたのだらうと思われます。當時は町を離れた虎杖いたどりの里に、兄妹がくらしして、若主人の方は、町中のある会社へ勤めていると、この由、番頭が話してくれました。一昨年の事なのです。

——いま私は、可恐おそろしい吹雪の中を、そこへ志しているのであります——



が、さて、一昨年その時は、翌日、半日、いや、午後三時頃まで、用もないのに、女中たちの蔭で怪む氣勢あやしけはいのするのが思い取られるまで、腕組が、肘ひじまくら枕で、やがて夜具を引被ひつかぶつてまで且つ思い、且つ悩み、幾度いくたびか逡巡しゆんじゆんした最後に、旅館をふらふらとなつて、とうとう恩人を訪ねに出ました。

わざと途中、余所よそで聞いて、虎杖村に憧憬あこがれ行く。……

道は鎮守がめあてでした。

白い、静しずかな、曇つた日に、山吹も色が浅い、小流こながれに、苔蒸こけむした石の橋が架かつて、その奥に大きくはありませんが深く神寂かんさびた社やしろがあつて、大木の杉がすらすらと杉なりに並んでいます。入口の石の鳥居の左に、とりわけ暗く聳そびえた杉の下もとに、形はつい通り

であります。雪難之碑と刻んだ、一基の石碑が見えました。

雪の難——荷担夫にかつぎいふ、郵便配達の人たち、その昔は数多あまたの旅客

も——これからさしかかって越えようとする峠路とうげみちで、しばし

ば命を殞おとしたのでありますから、いづれその霊を祭つたのである

う、と大空の雲、重かさなる山、続いただきそびく巔、聳そびゆる峰を見るにつけて、凄

じき大濤おおなみの雪の風情を思いながら、旅の心も身に沁しみて通過すさまぎ

ました。

暇なわてみち道 少しばかり、菜種あせの畦あぜを入つた処に、志いおりす庵いおりが見えま

した。侘わびしい一軒家の平屋ですが、門かどのかかりに何となく、むか

しの状さまを偲しのばせませす、萱草かやぶきの屋根ではありません。

伸上る背戸に、柳が霞んで、ここにも細流せせらぎに山吹の影の映る

のが、絵に描いた蛍の光を幻に見るようでありました。

夢にばかり、現うつにばかり、十幾年。

不思議にここで逢いました——面影は、黒髪こうがいに笄かぎして、雪の襦か

いどりいどり襦ゆすした貴夫人のように遥はるかに思ったのとは全然まるで違ちがいました。黒くろじ

縷ゆす子の襟えりのかかった縹しまの小袖こいぐちに、ちつとすき切れのあるばかり、

空色の絹のおなじ襟えりのかかった筒袖こいぐちを、帯も見えないくらい引

合あせて、細ほっそりと着きていました。

その姿で手をつきました。ああ、うつくしい白い指、結ゆいた立たての

品のいい円鬘まるまげの、情なさけらしい柔順すなおな鬘たぼの耳みみたぶ朶たぶかけて、雪うなじなす項け

が優やさしく清あやらかに俯うつむ向むいたのです。

生意ステツキ気に杖つえを持もって立たっているのが、目めくるめくばかりに思おもわ

れました。

「私は……関……」

と名を申して、

「蔦屋さんのお嬢さんに、お目にかかりたくて参りました。」

「米は私わたくしですございます。」

と顔を上げて、清すずしい目で熟じつと視みました。

私の額は汗ばんだ。——あのいつか額に置かれた、手の影ばかり白く映る。

「まあ、関さん。——おとなにおなりなさいました……」

これですもの、可なつかし懐なつかしさはどんなでしょう。

しかし、ここで私は初恋、片おもい、恋の愚痴ぐちを言うのではあ

りません。

……この凄<sup>すご</sup>い吹雪の夜<sup>よ</sup>、不思議な事に出あいました、そのお話をするのであります。

#### 四

その時は、四<sup>か</sup>疊<sup>こい</sup>半<sup>い</sup>ではありません。が、炉を切った茶の室<sup>ま</sup>に通されました。

時に、先客が一人ありまして炉の右に居ました。気高いばかり品のいい年とつた尼さんです。失礼ながら、この先客は邪魔でした。それがために、いとど拙<sup>つたな</sup>い口の、千の一つも、何にも、もの

が言われなかつたのであります。

「あなた貴女は煙草たばこをあがりますか。」

私はお米さんが、その筒袖こいぐちの優しい手で、煙管きせるを持つのを視みてそう言いました。

お米さんは、控えてちよつと俯向うつむきました。

「何事もわすれ草と申しますな。」

と尼さんが、能の面がものを言うように言いました。

「関さんは、今年三十五におなりですか。」

とお米さんが先へ数えて、私の年を訊たずねました。

「さんぺき三二碧さんのう。」

と尼さんが言いました。

「貴女は？」

「私は一つ上……」

「四緑しろくのう。」

と尼さんがまた言いました。

——略して申すのですが、そこへ案内もなく、ずかずかと入つて来て、立状たちざまにちよつと私を尻目にかけて、炬の左の座についた一人にんがあります——山伏か、隠者か、と思う風采ふうさいで、もの鷹揚おうような、悪く言えば傲慢ごうまんな、下手が画えに描いた、奥州めぐりの水戸の黄門といった、鼻の隆たかい、髯ひげの白い、早や七十ばかりの老人でした。

「これは関さんか。」

と、いきなり言います。私は吃驚びっくりしました。

お米さんが、しなよく頷うなずきますと、

「左様か。」

と言つて、これから滔とうとう々と弁じ出した。その弁ずるのが都会

における私ども、なかま、なかまと申して私などは、ものの数で

もないのですが、立派な、画せんせいの画伯がた方の名を呼んで、片かた端つばし

から、奴やつがと苦り、あれめ、と蔑さげすみ、小僧、と呵から々と笑います。

私は五六尺飛とびさ退がつて叩頭おじぎをしました。

「汽車の時間がございますから。」

お米さんが、送つて出ました。花菜ななかばの中を半の時、私は香むせに咽

んで、涙ぐんだ声して、



「お寂しくおいでなさいましょう。」

と精一杯に言ったのです。

「いいえ、兄と一緒にですから……でも大雪の夜<sup>よ</sup>などは、町から道が絶えますと、ここに私一人きりで、五日も六日も暮しますよ。」  
とほろりとしました。

「そのかわり夏は涼しゅうございます。避暑にいらつしやい……お宿をしますよ。……その時分には、降るように螢が飛んで、この水には菖蒲<sup>あやめ</sup>が咲きます。」

夜汽車の火の粉が、木の芽峠を螢に飛んで、窓にはその菖蒲が咲いたのです——夢のようです。……あの老尼は、お米<sup>ま</sup>さんの守

護神もりがみ——はてな、老人は、——知事の怨おんりよう靈りようではなかつたか。

そんな事まで思いました。

円鬻まるまげに結つて、筒袖こいぐちを着た人を、しかし、その二人はかえ

つて、お米さんを秘密の霞に包みました。

三十路みそじを越えても、窶やつれても、今もその美しさ。片田舎の虎杖

になぞ世にある人とは思われません。

ために、音信おとずれを怠りました。夢に所がきをするようですから。

……とは言え、一つは、日に増し、不思議に色の濃くなる炉の右左の人を憚はばかつたのであります。

音信して、恩人に礼をいたすのに仔細しさいはない筈はず。けれども、下

世話にさえ言います。慈悲すれば、何とかする。……で、恩人と

いう、その恩に乘じ、情なさけに附入るような、賤いやしい、浅ましい、卑劣な、下司げすな、無礼な思いが、どうしても心を離れないものですから、ひとり、自ら憚られたのであります。

私は今、そこへ——

## 五

「ああ、あすこが鎮守だ——」

吹雪の中の、雪道に、白く続いたその宮を、さながら峰に築いたように、高く朦朧もうろうと仰ぎました。

「さあ、一息。」

が、その息が吐けません。

真俯向けまうつむに行く重い風の中を、背後うしろからスツと軽く襲つて、裾すそ頭かしらをどツと可おそろし恐おそろしいものが引包むと思つと、ハツとひき息になる時、さつと抜けて、目の前へ真白まっしろな大な輪おおきの影あらいわが顕あらわれます。とくるくると廻るのです。廻りながら輪を巻いて、巻き巻き巻込めると見ると、たちまち凄すさましい渦うずになつて、ひゆうと鳴りながら、舞上つて飛んで行く。……行くと否や、続いて背後うしろから巻いて来ます。それが次第に激しくなつて、六ツ四ツ数えて七ツ八ツ、身体からだの前後前後に列を作つて、巻いては飛び、巻いては飛びます。巖いわにも山にも砕けないで、皆北海の荒波の上へ馳はしるのです。——もうこの渦うずがこんなに捲まくようになりましては堪たえられません。この

渦の湧立つ処は、その跡が穴になって、そこから雪の柱、雪の人、雪女、雪坊主、怪しい形がぼつと立ちます。立って倒れるのが、そのまま雪の丘のようになる……それが、右になり、左になり、横に積り、縦に敷きます。その行く処、飛ぶ処へ、人のからだを持って行って、仰向けにも、俯向せにもたたきつけるのです。

——雪難之碑。——峰の尖ったような、その大木の杉の梢を、睫毛まつげにのせて倒れました。私は雪に埋れて行く……身動きも出来ません。くいしばっても、閉じても、目口に浸む粉雪を、しかし紫陽花あじさいの青い花片はなびらを吸うように思いました。

——「菖蒲あやめが咲きます。」——

蛍が飛ぶ。

私はお米さんの、清くあたたか暖かきは膚だを思いながら、雪にむせんで叫びました。

「魔が妨げる、天狗てんぐの業わざだ——あの、尼さんか、怪しい隠士か。」

大正十（一九二一）年四月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十一卷」岩波書店

1941（昭和16）年9月30日

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 雪霊記事

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>